春日灯籠および類形灯籠の 形態的特徴について

U. D. C. 712

平 山 勝 蔵

On the Typical Features of "Kasuga" and other Similar Type Garden Lanterns by Katuzo HIRAYAMA

I 春日灯籠及び類形灯籠の形式的区分

春日灯籠及び類形灯籠は庭灯籠中の竿立灯籠に属し、灯頭に空輪、笠、火袋、受台を有し、灯身に竿、地輪を有するものをいう。その場合、灯頭及び灯身の各部分は春日灯籠及び類形灯籠としての形態的特徴を有するものにして、即ち、空輪は宝珠、受花、露盤、覆鉢の四部分或は露盤、覆鉢の何れかを欠いた三部分より成り、笠は大棟、屋中、軒の三部分より成り、火袋は欄間、火口(及び窓)、腰の三部分より成り、受台は段、受鉢、受座の三部分より成り、竿は上竿、下竿、上節、中節、下節の五部分より成り、地輪は蓮座、礎盤の二部分より成り総じて地輪を基礎上に立つものである。春日灯籠及び類形灯籠に属する種別的形式には概ね六角形式が多く、従つて、灯頭及び灯身の各部分に専ら六角形の平面形を有するものが多い。但し、灯身の竿部分には円形の平面形を有するものが少なくない。その形式に属するものには春日形、奥の院形、菰戸形、三月堂形、蟬丸形、道明寺形、元興形、灯明寺形、太秦形、飛鳥形、白太夫形、平等院形などがある。

II 春日灯籠及び類形灯籠の種別的特徴

1 春日形の特徴

春日灯籠の空輪は三部分より成り、宝珠は立擬宝珠形受花は薄手の椀形にして6弁(大6弁・小6弁)の蓮花紋を刻み、覆鉢は短い円柱形。笠は三部分より成り、大棟は極めて薄い六角柱形、屋中は六方寄棟にしてうねり形の比較的強い勾配をもち、軒は六方とも比較的厚くして弱い反りをつけ、六隅の軒先には蕨手をもつ。火袋は六角柱形にして三部分より成り、欄間は六方とも長角形を刻み、火口は前後の二方に角形火口を造り、窓は右側の二方にそれぞれ日形窓(日・雲)、文様窓(鹿)を造り、左側の二方にそれぞれ月形窓(月・雲)、文様窓(山)を造り、腰は欄間と同じく六方に長角形(或は格狭間)を刻む。受台は三部分より成り、段は薄い六角柱形にして二段、隅角はともに垂直(或は無肩)受鉢は比較的厚目の六角柱形にして六方に二箇ずつの格狭間を刻み、受座は厚手の椀形にしてうねり形のゆるい勾配をもち、12

弁(大12弁・小12弁)の蓮花紋を刻む。竿は五部分より成り、上竿、下竿ともに円柱形にして比較的長く、上節下節は二環、中節は三環造り。地輪は二部分より成り、蓮座は厚手の伏椀形にして12弁(大12弁・小12弁)の蓮花紋を刻み、礎盤は薄い六角柱形にして粗面を造る。

2 奥の院形の特徴

奥の院形の空輪は四部分より成り、宝珠は立擬宝珠形受花は薄手の椀形にして12弁(大12弁・小12弁)の蓮花紋を刻み、覆鉢は六角柱形にして比較的長く、露盤は極めて薄い六角柱形。笠は三部分より成り、大棟は極めて薄い六角柱形、屋中は六方寄棟にしてうねり形の比較的強い勾配をもち、軒は六方とも比較的厚くして弱い反りをつけ、六隅の軒先には蕨手をもつ。笠裏には特に六角柱形の三段を造る。火袋は六角柱形にして三部分より成り、欄間は六方とも額縁長角形を刻み、火口は前後の二方に角形火口を造り、窓は右側の二方にそれぞれ日形窓(日・雲)、文様窓(山・雄鹿・雌鹿)を造り、左側の二方にそれぞれ日形窓(日・雲)、文様窓(柳・橋・水鳥)を造り、腰は欄間と同じく六方に額縁長角形を刻む。受台は三部分より成り、段は一段にして18弁(大18弁・小18弁)の蓮花紋を円形に刻み、受鉢は比較的厚目の六角柱形にして、六方に二箇ずつの唐獅子を刻み、受座は厚手の椀形にしてうねり形のゆるい勾配をもち、12弁(大12弁・小12弁)の蓮花紋を刻む。竿は五部分より成り、上竿、下竿はともに円柱形にして比較的長く、上節、下節はともに二環、中節は三環造り。地輪は二部分より成り、蓮座は上部に円柱形12弁(大12弁・小12弁)の蓮花紋を刻み、下部に厚手の伏椀形12弁(大12弁・小12弁)の蓮花紋を刻む。礎盤は比較的厚い六角柱形にして六方に二箇ずつの格狭間を刻む。

3 菰戸形の特徴

菰戸形の空輪は三部分より成り、宝珠は立擬宝珠形、受花は薄手の椀形にして蓮花紋を欠く、覆鉢は円柱形。笠は三部分より成り、大棟は極めて薄い円柱形、屋中は六方寄棟にしてうねり形の比較的強い勾配をもち、軒は六方とも比較的厚くして弱い反りをつけ、六隅の軒先には蕨手をもつ。火袋は六角柱形にして三部分より成り、欄間は六方とも額縁長角形(横線長角)を刻み、火口は

前後の二方に角形火口を造り、窓は右側の二方にそれぞれ宝珠窓（宝珠・連子）、文様窓（雄鹿）を造り、左側の二方にそれぞれ宝珠窓（宝珠・連子）、文様窓（雌鹿）を造り、腰は六方に一箇ずつの格狭間を刻む。受台は三部分より成り、段は二段にしてともに薄い六角柱形、隅角は何れも垂直、受鉢は比較的厚目の六角柱形にして、六方に二箇ずつの格狭間を刻み、受座は厚手の椀形にしてうねり形のゆるい勾配をもち、12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻む。竿は五部分より成り、上竿、下竿はともに円柱形にして比較的長く、上節、下節はともに二環中節は三環造り。地輪は二部分より成り、蓮座は上部に円柱形の段を造り、下部に厚手の伏椀形12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻み、礎盤は比較的厚い六角柱形にして、六方に二箇ずつの格狭間を刻む。

4 三月堂形の特徴

三月堂形の空輪は三部分より成り、宝珠は立擬宝珠形受花は薄手の椀形にして12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻み、覆鉢は円柱形。笠は三部分より成り、大棟は極めて薄い六角柱形、屋中は六方寄棟にしてうねり形の比較的強い勾配をもち、軒は六方とも比較的厚くして弱い反りをつけ、六隅の軒先には蕨手をもつ。火袋は六角柱形にして三部分より成り、欄間は二箇ずつの長角形（校倉文様）を刻み、火口は前後の二方に角形火口を造り、左右の四方にそれぞれ文様窓（連子・長角）を造り、腰は六方に二箇ずつの格狭間を刻む。受台は三部分より成り、段は二段にしてともに薄い六角柱形、隅角はともに垂直、受鉢は比較的厚目の六角柱形にして、六方に二箇ずつの格狭間を刻み、受座は厚手の椀形にしてうねり形のゆるい勾配をもち、12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻む。竿は五部分より成り、上竿、下竿はともに円柱形にして比較的長く、上節、下節はともに二環中節は三環造り、地輪は二部分より成り、蓮座は上部に薄い円柱形を造り、中部に同じく薄い円柱形を造り、下部に厚手の伏椀形8弁（大8弁・小8弁）の蓮花紋を刻む。礎盤は薄い四角柱にして粗面を造る。

5 蟬丸形の特徴

蟬丸形の空輪は二部分より成り、宝珠は立擬宝珠形、受花は厚手の椀形。笠は三部分より成り、大棟は極めて薄い六角柱形、屋中は六方寄棟にしてうねり形の比較的強い勾配をもち、軒は六方とも比較的厚くして弱い反りをつけ、六隅の軒先には蕨手をもつ。火袋は六角柱形にして三部分より成り、欄間は六方とも長角形（横線長角）を刻み、火口は前方に角形火口を造り、窓は後方に日形窓（日・連子）、左右の四方にそれぞれ文様窓（連子・長角）を造り、腰は六方とも二箇ずつの格狭間を刻む。受台は三部分より成り、段は薄い六角柱形にして二段、隅角はともに垂直、受鉢は比較的厚目の六角柱形にして六方に二箇ずつの長角形を刻み、受座は厚手の椀形にし

てうねり形のゆるい勾配をもち、12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻む。竿は五部分より成り上竿、下竿はともに円柱形にして比較的長く、上節、下節はともに二環中節は三環造りにして、中環に蓮花（4箇）と珠紋（16箇）とを刻む。地輪は二部分より成り、蓮座は上部に円柱を造り、下部に厚手の伏椀形12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻み、礎盤は比較的厚目の六角柱形を造る。

6 道明寺形の特徴

道明寺形の空輪は一部分より成り、即ち、宝珠は立擬宝珠形造り。笠は三部分より成り、大棟は極めて薄い六角柱形、屋中は六方寄棟にしてうねり形の比較的強い勾配をもち、軒は六方とも比較的厚くして弱い反りをつけ六隅の軒先には蕨手をもつ。火袋は六角柱形にして三部分より成り、欄間は六方とも二箇ずつの長角形（横線長角）を刻み、火口は前方に角形火口を造り、窓は後方に日形窓（日・連子・枅形）を造り、左右の四方にそれぞれ文様窓（連子・枅形）を造り、腰は六方とも二箇ずつの長角形を刻む。受台は三部分より成り、段は薄い六角柱形にして二段、隅角はともに垂直、受鉢は比較的厚目の六角柱形にして、六方に二箇ずつの長角形を刻み、受座は厚手の椀形にしてうねり形のゆるい勾配をもち、12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻む。竿は五部分より成り、上竿、下竿はともに円柱形にして比較的長く、上節、下節はともに二環中節は三環造り。地輪は二部分より成り、蓮座は上部に円柱形12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻み、下部に厚手の伏椀形12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻む。礎盤は比較的厚目の六角柱形にして、六方に一箇ずつの格狭間を刻む。

7 元興寺形の特徴

元興寺形の空輪は二部分より成り、宝珠は立擬宝珠形覆鉢は短い円柱形造り。笠は三部分より成り、大棟は極めて薄い六角柱形、屋中は六方寄棟にしてうねり形の比較的強い勾配をもち、軒は六方とも比較的厚くして弱い反りをつけ、六隅の軒先には蕨手をもつ。火袋は六角柱形にして三部分より成り、欄間は六方とも長角形を刻み火口は前後の二方に角形火口を造り、窓は左右の四方にそれぞれ二箇ずつの文様窓（連子・長角と仏像・連座）を造り、腰は六方とも二箇ずつの格狭間を刻む。受台は三部分より成り、段は薄い六角柱形にして一段、隅角は何れも垂直。受鉢は極めて薄い六角柱形、受座は厚手の椀形にしてうねり形のゆるい勾配をもち、12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻む。竿は五部分より成り、上竿、下竿はともに円柱形にして比較的長く、上節、下節はともに二環中節は三環造り。地輪は二部分より成り蓮座は上部に薄い円柱形を造り、下部に厚手の伏椀形12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻み、礎盤は比較的厚い六角柱形にして六方に二箇ずつの格狭間を刻む。

8 灯明寺形の特徴

灯明寺形の空輪は三部分より成り、宝珠は立擬宝珠形受花は薄手の椀形にして12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻み、覆鉢は円柱形造り。笠は三部分より成り、大棟は極めて薄い六角柱形、屋中は六方寄棟にしてうねり形の比較的強い勾配をもち、軒は六方とも比較的厚くして弱い反りをつけ、六隅の軒先には蕨手をもつ。火袋は六角柱形にして三部分より成り、欄間は六方とも二箇ずつの長角形（校倉文様）を刻み、火口は前後の二方に角形火口を造り、窓は右側の二方にそれぞれ日形窓（日・雲・花菱）、文様窓（牡丹）を造り、左側の二方にそれぞれ日形窓（日・雲・九曜星）、文様窓（雲竜）を造り腰は六方 も二箇ずつの格狭間を刻む。受台は三部分より成り、段は一段の円形むくれ形にして18弁（大18弁・小18弁）の蓮花紋を刻み、受鉢は比較的厚目の六角柱形にして、六方に二箇ずつの唐獅子を刻み、受座は厚手の椀形にしてうねり形のゆるい勾配をもち、12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻む。竿は五部分より成り、上竿下竿はともに円柱形にして比較的長く、上節、下節はともに二環、中節は三環造り。地輪は二部分より成り、蓮座は上部に円柱形12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻み、下部に厚手の伏椀形12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻み、礎盤は比較的厚目の六角柱形にして六方に二箇ずつ格の狭間を刻む。

9 太秦形の特徴

太秦形の空輪は二部分より成り、宝珠は立擬宝珠形、受花は薄手の椀形にして12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻む。笠は三部分より成り、大棟は極めて薄い六角柱形、屋中は六方寄棟にしてうねり形の比較的強い勾配をもち、軒は六方とも比較的厚くして弱い反りをつけ、六隅の軒先には蕨手をもつ。火袋は六角柱形にして三部分より成り、欄間は六方とも直面を示し、火口は前方に角形火口を造り、窓は後方に日形窓を造り、左右の四方にそれぞれ文様窓（連子・四鱗形）を造り、腰は欄間と同じく六方とも直面を示す。受台は三部分より成り、段は薄い六角柱形にして一段を示し、隅角は何れも垂直、受鉢は比較的厚目の六角柱形にして六方に二箇ずつの長角形（横線長角）を刻み、受座は厚手の椀形にしてうねり形のゆるい勾配をもち、12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻む。竿は五部分より成り、上竿、下竿はともに円柱形にして比較的長く、上節、下節は二環、中節は三環造りにして、中環の四方に蓮花（4箇）を刻む。地輪は二部分より成り、蓮座は極めて薄い円形むくれ形にして、12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻み、中央部に薄い円柱形の竿台を浮刻する。礎盤は比較的厚い円柱形を造る。

10 飛鳥形の特徴

飛鳥形の空輪は三部分より成り、宝珠は立擬宝珠形、受花は薄手の椀形にして蓮花紋を欠き、覆鉢は短い円柱

形造り。笠は三部分より成り、大棟は極めて薄い六角柱形、屋中は六方寄棟にしてうねり形の比較的強い勾配をもち、軒は六方とも比較的厚くして弱い反りをつけ、六隅の軒先には蕨手をもつ。火袋は六角柱形にして三部分より成り、欄間は六方とも二箇ずつの長角形（横線長角）を刻み、火口は前方に角形火口を造り、窓は後方に日形窓（日・雲）を造り、左右の四方にそれぞれ日形窓（日・蓮花）、文様窓（長四目紋）を造る。腰は六方とも長角形（四鱗紋）を刻む。受台は三部分より成り、段は薄い六角柱形にして二段、隅角はともに垂直、受鉢は比較的厚目の六角柱形にして、六方に二箇ずつの格狭間を刻み、受座は厚手の椀形にしてうねり形のゆるい勾配をもち、12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻む。竿は五部分より成り、上竿、下竿はともに円柱形にして比較的長く、上節、下節はともに二環、中節は三環造り。地輪は二部分より成り、蓮座は上部に薄い円柱形を造り、下部に厚手の伏椀形12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻み礎盤は薄い六角柱形にして六方とも二箇ずつの格狭間を刻む。

11 白太夫形の特徴

白太夫形の空輪は三部分より成り、宝珠は立擬宝珠形受花は薄手の伏椀形にして12弁の蓮花紋を刻み、覆鉢は短い円柱形造り。笠は三部分より成り、大棟は極めて薄い六角柱形、屋中は六方寄棟にしてうねり形の比較的強い勾配をもち、軒は六方とも比較的厚くして弱い反りをつけ、六隅の軒先には蕨手をもつ。火袋は六角柱形にして三部分より成り、欄間は六方とも二箇ずつの長角形（雲紋長角）を刻み、火口は前後の二方に角形火口を造り、窓は右側の二方にそれぞれ文様窓（梅花・山）を造り、左側の二方にそれぞれ文様窓（唐獅子・梅花）を造る。腰は六方とも一箇ずつの格狭間を刻む。受台は三部分より成り、段は薄い六角柱形にして二段、隅角はともに垂直、受鉢は比較的厚目の六角柱形にして、六方に二箇ずつの格狭間を刻み、受座は厚手の椀形にしてうねり形のゆるい勾配をもち、12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻む。竿は五部分より成り、上竿、下竿ともに円柱形にして比較的長く、上節、下節はともに二環、中節は三環造り。地輪は二部分より成り、蓮座は上部に円柱形12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻み、下部に厚手の伏椀形12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻む。礎盤は比較的厚目の六角柱形にして六方に一箇ずつの格狭間を刻む。

12 平等院形の特徴

平等院形の空輪は三部分より成り、宝珠は立擬宝珠形受花は薄手の椀形にして12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻み、露盤は薄い六角柱形造り。笠は三部分より成り、大棟は極めて薄い六角柱形、屋中は六方寄棟にしてうねり形の比較的強い勾配をもち、軒は六方とも比較的

厚くして弱い反りをつけ、六隅の軒先には蕨手をもつ。火袋は六角柱形にして（但し、二箇の三角柱形の板石を左右に立込む）、三部分より成り、欄間は四方（但し、二方に欄間を欠く）とも直面造り。火口は前後の二方に角形火口を造り（欄間及び腰の部分を取入れる）、窓は左右の四方にそれぞれ日形窓（日・双長角）文様窓（双長角）を造る。腰は四方（但し二方に腰部分を欠く）とも二箇ずつの長角形（縦線長角・斜線長角）を刻む。受台は三部分より成り、段は薄い六角柱形にして一段、隅角は何れも斜切り造り。受鉢は比較的厚目の六角柱形。受座は厚手の椀形にしてうねり形のゆるい勾配をもち、12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻む。竿は五部分より成り、上竿、下竿はともに円柱形にして比較的長く、上節、下節はともに二環、中節は三環造り。地輪は二部分より成り、蓮座は上部に円柱形を造り、下部に厚手の伏椀形にして12弁の蓮花紋を刻み、礎盤は薄い六角柱形にして六方ともに一箇ずつの格狭間を刻む。

Ⅲ 春日灯籠及び類形灯籠の細部的特徴

1 空輪の特徴

春日灯籠及び類形灯籠の空輪は宝珠、受花、覆鉢の三部分より成るものが多く、ときに宝珠、受花、覆鉢、露盤の四部分或は宝珠、受花、露盤の三部分より成るものも少なくない。又、宝珠、受花及び宝珠、覆鉢の二部分或は宝珠の一部分より成るものも稀れには存在する。宝珠は立擬宝珠形が多く、受花は薄手の椀形にして12弁（大12弁及び小12弁）の蓮花紋を刻むものが多い。ときに蓮花紋を欠くものも稀れには存する。覆鉢は概ね円柱形を造る。ときに、六角柱形を造るものも存する。露盤は専ら六角柱形をなす。空輪の形態を割合的に見れば、別表の通りであり、高さの割合が7より16までを示し、巾の割合が9より14までを示すことは、空輪の形態が比較的狭小であることを示すものといえる。

2 笠の特徴

春日灯籠及び類形灯籠の笠は専ら大棟、屋中、軒の三部分より成り、大棟は極めて薄い六角柱形をなす。屋中は六方寄棟をなし、うねり形の比較的強い勾配をもつ。軒は六方とも比較的厚くして弱い反りをつけ、六隅の軒先には蕨手をもつ。笠の形態を割合的に見れば、別表の通りであり、高さの割合が9より14までを示し、巾の割合が25より44までを示すことは、笠の形態が比較的薄く且横張りであることを示すものといえる。

3 火袋の特徴

春日灯籠及び類形灯籠の火袋は専ら六角柱形にして、欄間、火口（及び窓）、腰の三部分より成り、欄間は六方或は四方に長角形（縦線長角、横線長角、斜線長角、校倉長角、雲紋長角）を刻むものが多い、ときに、直面を示すものも少なくない。火口は前後の二方に角形火口

を造るものが多く、ときに、前方の一方に角形火口を造るものも存する。窓は左右の四方に日形窓、宝珠窓、文様窓を造るものが多く、ときに後方に日形窓を造るものも存する。腰は専ら二箇或は二箇ずつの格狭間を刻むものが多い、ときに、直面を示すものも少なくない。火袋の形態を割合的に見れば、別表の通りであり、高さの割合が17より21までを示し、巾の割合が19より25までを示すことは、火袋の形態が比較的高さや太さに豊かであることを示すものといえる。

4 受台の特徴

春日灯籠及び類形灯籠の受台は専ら段、受鉢、受座の三部分より成り、段は極めて薄い六角柱形にして二段で隅角の垂直を示すものが多い、ときに、一段にして蓮花紋を刻むものも存する。受鉢は比較的厚目の六角柱形にして、六方に二箇ずつの格狭間或は唐獅子などを刻むものが多い。受鉢は厚目の椀形にしてうねり形のゆるい勾配をもち、12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻むものが多い。受台の形態を割合的に見れば、別表の通りであり、高さの割合が9より12までを示し、巾の割合が24より34までを示すことは、受台の形態が比較的薄く横張りであることを示すものといえる。

5 竿の特徴

春日灯籠及び類形灯籠の竿は上竿、下竿、上節、中節下節の五部分より成り、上竿及び下竿は円柱形にして比較的長い。上節及び下節は二環を造り、中節は三環を造る。ときに、中節の中環に蓮花或は珠紋を刻むものも存する。竿の形態を割合的に見れば、別表の通りであり、高さの割合が32より42までを示し、巾の割合が13より17までを示すことは、竿の形態が比較的細く且長いことを示すものであるといえる。

6 地輪の特徴

春日灯籠及び類形灯籠の地輪は蓮座、礎盤の二部分より成り、蓮座は厚手の伏椀形にして12弁（大12弁・小12弁）の蓮花紋を刻むものが多い。ときに、二段を造るものも少なくない。礎盤は比較的厚目の六角柱形にして、六方に一箇或は二箇ずつの格狭間を刻むものが多い。ときに、比較的厚手の円柱形を造るものも存する。地輪の形態を割合的に見れば、別表の通りであり、高さの割合が7より16までを示し、巾の割合が28より46までを示すことは、地輪の形態が比較的薄く且横張りであることを示すものといえる。

春日灯籠及び類形灯籠細部の高さ及び巾と

灯高との割合表

表中の数字は空輪・笠・火袋・受台・竿・地輪の各高さ及び各巾と各灯高との割合を求めたものであり、それらの割合を見易くするために100倍したものを。

A = 高さの割合 B = 巾の割合

種 別	空輪と 灯 高		笠と 灯 高		火袋と 灯 高		受台と 灯 高		竿と 灯 高		地輪と 灯 高	
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
春日形	14	9	13	41	17	21	11	31	36	16	9	28
奥の院形	11	11	11	35	20	20	10	30	32	14	16	37
棧戸形	16	12	14	36	19	19	9	31	32	14	10	35
三月堂形	12	9	9	34	20	21	10	32	42	15	7	35
蟬丸形	11	10	11	39	21	24	12	27	36	14	9	36
道明寺形	7	9	12	37	20	23	11	31	35	17	15	38
元興寺形	11	10	13	37	19	23	9	33	37	14	11	34
灯明寺形	12	10	12	39	19	22	10	34	35	16	12	38
太秦形	14	10	12	39	20	20	9	34	34	16	11	33
飛鳥形	15	10	12	39	19	20	9	32	35	13	10	32
白太夫形	16	14	9	25	18	23	11	24	34	15	12	33
平等院形	11	10	10	44	18	25	10	34	38	16	13	46

SUMMARY

"Kasuga" and other similar type lanterns belong to the so called "Sao-dati-doro" or lanterns standing with columns, having "Kurin" or spires, "Kasa" or umbrellas, "Hibukuro" or lantern boxes and "Ukedai" or sustaining rests in the upper part, and "Sao" or columns and "Jirin" or ground circular rests in the lower body. "Kurin" is usually composed of three parts: "Hoju" or literally a divin jewel, an

ornamental top, "Ukehana" or a rest shaping lotus flowers and "Fukubati" or literally a pot turned over, used as a supporter of "Ukehana", sometimes adding "Roban" or a ground plate to them, in this case four parts, and sometimes losing one or two or them but "Hoju" remaining in all cases. "Kasa" is generally formed of three parts: "Omune" or a large ridge literally, meaning the uppermost ridge, "Yanaka" or an intermediate roof and "Noki" or an eaves, "Omune" being a hexagonal plate and thin, "Yanaka" a six sided hip-roof with S-letter shaped and comparatively steep inclination, "Noki" comparatively thick on all six sides having "Warabite" or bracken-shaped ornaments at their six corners. "Hibukuro" is a hexagonal hollow column and each side has "Ramma" or a transom window, "Higuti" or lighting hole otherwise a window and "Kosi" or a skirting. "Ukedai" consists of three parts called "Dan", "Ukedai" and "Ukeza", all three piled up to rest "Hibukuro". "Sao" is columnar and divided into five parts: "Uebusi" or an upper joint, "Uezao" or an upper column, a middle joint, a lower column and a lower joint. "Jirin" is made of two parts: "Renza" or a lotus-flower shaped seat and "Soban" or a ground rest and is firmly set on the foundation.

NWES

東京都井の頭公園に熱帯島温室完成

熱帯植物を植栽すると共に、熱帯魚を放し飼いにするという世界にも珍しい温室が昭和36年11月に開館した東京の西郊井の頭公園内井の頭自然文化園に35年8月着工され、総工費約5,700万円で完成したものである。鉄筋コンクリート造一部2階、延1,156.05平方メートル、内温室本体582.75平方メートル、間口31.5メートル、奥行18.5メートル、高さ前面9.93メートル、後面15.43メ

ートル、飼育鳥類約510羽、熱帯植物154柱300株が収容されている。暖房は温風循環方式で、発熱量40万KCal/hの主熱風炉から毎分492立方メートルの温風を、室内に噴気させている。また一部温水循環暖房も使用しており冬期7°C以下にならないようサーセスタットにより調節してある。夏期の温度上昇にそなえては、天窓開放と、散水ノズルによる散水が用意されている。(川本)